

「シャンティ」通巻283号 2016年1月1日発行（1・4・7・10月の1日発行）
1985年6月28日 第二種郵便物承認

Shanti

シャンティ

2016年1月
ふゆ

283

子どもの
より良い
成長のために

新年あけましておめでとうございます。
本年12月にシャンティは35周年を迎えます。
これもご協力ご支援をいただいている
皆さまのおかげと深く感謝申し上げます。

今年、カンボジアでは本格的に幼児教育事業を始めます。
一生の学びのためには、実は幼児期がとても大切。
特集ではそのことを詳しくお伝えします。

そして、カンボジアの農村にできた
コミュニティ図書館(CLC)は、
大きな飛躍を遂げ、村人の笑顔が広がっています。
識字教室や生活向上士の研修、外のコミュニティホールで
行われている映画上映会や村の市場、学校の授業などを
ご覧ください。

シャンティ 283号 目次
Index

定点観測…アジアから

カンボジア/ラオス/ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ
アフガニスタン/ミャンマー
岩手/気仙沼/山元

特集1 子どものより良い成長のために
カンボジア・幼児教育事業

特集2 地域に根ざして

コミュニティ図書館(CLC)事業

日本しゃんていな旅 大輪寺

世界の絵本を読んでみよう

「おいしいごちん」民話絵本 ラオス

シャンティな人たち

天竜厚生会 カンボジア幼児教育事業プロジェクトチーム

おしらせ/編集後記
道「カンボジアへの思い」 理事 早坂文明

表紙の絵本:

上から『はらぺこあおむし』(信成社)、
『ふたごのまるまるちゃん』(教育画劇)、
『ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ』(ペンギン社)、
『三びきのこぶた』(福音館書店)

目次写真:

教室に駆け込む幼児たち
カンボジア (写真:表紙とも川畑嘉文)



ドリーム小学校事業と住民参加による学校図書館運営事業の4年間

報告：萩原宏子（カンボジア事務所）

カンボジア **Cambodia**

2012年から開始した「ドリーム小学校事業」と「住民参加による学校図書館運営事業」が、2015年で終了しました。この間、学校の先生や地域の方、そして子どもたちと協力して、校舎や図書館の建設、図書室の改装、図書館員の能力強化などを計41校で行ってきました。

「図書室が新しくなってから、子どもたちがたくさん来て大変なんだよ」「子どもたちの名前はみんな覚えてるの。本の貸出帳に名前を書くのが追いつかないんですもの」と、笑顔で、ちよつと誇らしげだった図書館員たち。「シャンティと事業を行ってから、地域の人たちが前より協力してくれるようになったんだ」と話してくれた校長先生。「ちよつとだけけど、私も図書館のために寄付をしたんですよ」孫娘への思いと一緒に、図書館への期待を語ってくれたおばあちゃん。本当にたくさんの笑顔に出会うことができました。

日本からのあたたかいご支援に、心から感謝申し上げます。ありがとうございます。（写真：川畑嘉文）



はじめての絵本づくり

Laos ラオス

報告：山室仁子（ラオス事務所）

今年度の絵本出版はルアンパバーン県在住の画家に絵付けをしてもらっています。画家の1人、カンパンさんにお話を伺いました。

「私はルアンパバーン美術学校の教員ですが、これまでは副収入として寺院や風景の絵を描きナイトマーケットやホテルで売っていました。絵本の絵を描くのは初めての経験です。最初にシャンティの職員から絵本の作り方や絵を描くときに気をつけるポイントを説明された時は、これまでになく知識を得られて嬉しかったです。同じ登場人物を場面によって表情や角度やしくさで表現を変えていくことが難しい時もありましたが、絵付け作業は自分にとっては新しい発見の連続で、楽しみながら作業に励むことができました。この経験は今後の自分の仕事にも大いに役立つと思います。何より自分が描いた絵本を自分の国の子どもたちが読むということが嬉しいです。私にも子どもが2人いますが、早く出来上がった作品を読み聞かせたいです」



パルーン遊び (写真: 川畑嘉文)



シャンティは2016年、カンボジア西部のバタンバン州で、幼児教育事業を本格的に開始します。

子どもの
より良い
成長のために



新しい校舎が待ち遠しい!

報告: 長沢有華 (ミャンマー事務所)

ミャンマー Myanmar

ミヤレイヨン寺院学校は、初代校長であるトウマナ僧侶により1995年に設立されました。二代目のトウザナ校長(写真: 後列左)は「私が校長に就任した当時、竹と木をかき集めて作った校舎は勉強する環境としては決して良いと思えませんでした。しかし学校に通えない子どもたちに教育を提供したいという思いから、校舎の修繕を後回しにして学校運営を続けてきました」と当時を思い出しながら説明してくれました。待ちに待った新校舎建設が始まり、「この新校舎建設のためにカメラを買いました」ととても嬉しそうなトウザナ校長。毎日工事現場に足を運び、写真を撮っています。建設会社は昨年シャンティの支援で建設したミヤテンギ尼僧学校を担った業者で、学校、シャンティともに大変信頼を置いています。「私たち子どもたちに快適な学習環境を提供したい」と建設会社代表ティンコー氏(写真: 後列中央)はいつも笑顔で対応してくれます。たくさんの方の思いがこもった新校舎、完成が待ち遠しいです。





幼稚園を併設するコーク・ボンレイ小学校

カンボジアの幼稚園

まぶしいくらい青い空と白い雲の下、田んぼやココナツの木に挟まれた道をガタゴト行くと、学校が見えてくる。出迎えてくれた先生に、「チヨムリアップ・スオー（こんにはは）」とあいさつし、「幼稚園の教室を見せていただけますか」と声を掛ける。何十回と繰り返してきた対象幼稚園の選定調査でのことです。

カンボジアの公立幼稚園のほとんどが、小学校の空き教室を使う小学校併設型。ひび



下校風景

出稼ぎにきた家族の子どもたちの姿すら見られません。貧しい家庭がさらに厳しい状況に追い込まれ、子どもが教育を継続できず、貧困から脱却できない悪循環に陥っています。

なぜ幼児教育か？

子どもたちが教育を受け続け、貧困から抜け出すための方策の一つとして、世界的にも注目されているのが幼児教育です。乳幼児期は人間の発達の基礎となる重要な時期であり、脳もこの時期に最も急速に発達します。逆に、幼児期に適切なケアや教育を受けられずに生じた発達の遅れは、その後の発達段階で取り戻すことが難しくなります。小学校での学習にスムーズに移行できず、学習達成度の差や、留年、退学にもつながります。貧困やその他の不利な状況

なぜ幼児教育か？

割れたコンクリートの床。使わない備品が積み上げられ、半分倉庫のような教室。体に合わない小学生用のいすにしがみつこうように座る幼児。中には比較的状态の良いものもありますが、どこの幼稚園も絵本その他の教材はほとんどありません。

幼稚園の教室を眺めていると、黒板の前に先生が読み書きを教えているのをよく見ます。「私はずもともと小学校の教員なので、でも何をしたらいいかわからなくて、1年生の授業をしているのよ」。また、「もつと幼稚園を増やしたいんだけど、教室も先生も足りない」という声があるかと思えば、「農繁期になると、親が忙しくて子どもを幼稚園に連れて来なくなる」と悩む先生もいます。

一通りの情報収集を終えた後、その日出会った住民代表の年配の男性がぼつりと言いました。「……子どもたちには、いい教育を受けてほしいんだ。自分は受けることができなかったから、子どもたちには——。言葉にこそしなかったものの、そんな思い

にある子どもほど、この畏に陥りがちです。実際カンボジアでは、小学校入学の適齢より上の年齢で入学する子どもの割合が26・5%、1年生の留年率が10・0%、退学率が6・3%に上ります。こうした子どもは、小学校すら卒業できず、基礎的なスキルを欠いたまま成長し、その後の生活や仕事で不利益を被る可能性が高くなります。

これに対し幼児教育は、子どもの「スキル・レディネス（準備性）」を高めることができます。つまり、身体・言語・認知・社会的／情緒的面での発達の基盤を整えられ、小学校での学習への準備ができます。幼児教育を受けることで、留年や中退のリスクが減り、より良い学習成果を上げ、将来的にも高い教育を受ける傾向があることが、様々な研究で証明されています。困難な状況にある子どもたちが、人生における平等なスタートを切り、貧困の悪循環を防ぐことにつながります。

低い就園率、教育の質の課題

カンボジア教育省はここ数年、幼児教育の普及を急ピッチで進めており、幼稚園の数は増加傾向にあります。しかし、施設不

がにじんでいるように思えました。

経済発展の影で

ボル・ポト政権下の恐怖政治と内戦で多くの人が犠牲になったカンボジア。教育や文化は否定され、文字の読み書きができるといっただけで人が殺されました。その後、復興が進み、最近では経済成長が注目されています。

一方で貧富の格差は拡大しています。農村部では今も読み書きができず困っている人や、日々の生活の厳しさから国内外へ出稼ぎに行かざるを得ない人も多くいます。将来の夢は？との問いに、「小学校を卒業すること」と答える貧しい農家の男の子。タイのバンコクのスラムでは、カンボジアから



大きすぎる机といすを使っている子ども

足や教員不足が深刻で、現場のニーズに対応できていません。幼児教育を受ける5歳児の割合は35%（2008/2009年）から61・4%（2014/2015年）に伸びましたが、依然として低い水準にとどまっています。3歳児、4歳児に至っては、それぞれ16・6%、29・1%に過ぎません。

幼稚園における教育の質も課題です。幼稚園教員の養成校はプノンペンに1カ所あるのみで、教員の育成が追いついていません。十分な研修もないまま小学校の教員が幼稚園教員として勤務している例が多く見られます。貧弱な教室環境で、教材や絵本もほとんどなく、質の改善に向けてやるべきことは山積しています。

（カンボジア事務所 萩原宏子）



教室の床は土がむき出しのまま（幼稚園の授業風景）

幼児教育事業の 3本柱

長年取り組んできた図書館活動の経験を活かし、子どもたちが「楽しく、遊びや経験を通して学ぶ」幼稚園づくりを目指します。2016～2018年の3年間で、バットンバン州の小学校併設の公立幼稚園36ヵ所を支援します。本事業はJICA草の根技術協力事業の一環として実施しています。

1 先生を育てる

— おはなしの推進や教材制作を通して

今回の事業で取り組む活動の一つが、おはなしの推進です。子どもは、おはなしを読み聞かせてくれる大人の愛情を敏感に感じ取り、自分が「大切にされている」と感じます。母語による豊かな言葉を幼児期にたくさん聞き、模倣しながら少しずつ言葉を知ること、言語の発達につながります。好奇心を育て、本に関心を持ち、将来的には自ら本を読もうとすることにつながります。おはなしを通して、ものごとの善悪や家族や友達と協力することの大切さ、論理的思考などを身につけることができます。図書館活動の経験を活かし、絵本を配布し、先生におはなしの研修を行うことで、幼稚園でのおはなしの推進に取り組みます。また、カンボジアの農村部の幼稚園には、とにかく「何もない」ところが多いことから、先生が自分で作れる教材制作の研修会を行います。

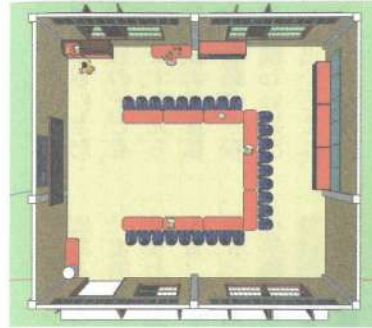
2 教室を楽しい場所に

— 子どもの発達を支える環境づくり

幼児期は、遊びを通して多様な原体験を得、世界への興味や関心の芽を育てていく時期です。そのため、子どもたちの意欲や好奇心を高め、「楽しい」「明日も行きたい！」と思える魅力的な教室環境を作ることが大切です。



ダンボールでつくった乗り物ブロックパズル。



幼稚園の教室レイアウト。教材用の棚や絵本棚、子どもの興味・関心を育てる自然物と絵本・図鑑を展示するコーナーなどを作る



シャンティ職員による『大きなかぶ』（福音館書店）の読み聞かせに熱中する子どもたち

3 幼児教育の啓発と 住民参加の推進

カンボジアにおける幼稚園の普及は、まだまだ始まったばかりです。小学校の空き教室に「とりあえず」幼稚園を併設しているだけ。親が忙しかったら子どもを幼稚園に連れてこなかったり、途中で子どもを通わせるのをやめてしまったり、そんなケースが珍しくありません。

地域住民の代表で構成される学校支援委員会や住民が幼児教育の重要性を理解し、子どもを積極的に幼稚園に送り、幼稚園の運営に協力するようになることを目指します。



おはなしの前の手遊び (p.13 写真：川畑嘉文)



コーク・ボンレイ小学校
校長
ホウン・シタさん

先生
の声



コーク・ボンレイ小学校
幼稚部教員
クイ・ソティダさん

1989年よりこの学校で働いています。私たちの学校には現在幼稚部が1クラスあり、35人の子どもたちが通っています。私たちの学校では小学校の教員が幼稚部で教えており、幼児向けの教授法がわからず日々の活動が困難なこともあります。

幼児教育は子どもたちが小学校に入学する前の準備ができるという点で非常に大切だと思えます。読み書き計算などを学ぶ基礎もできます。子どもを幼稚園に通わせる間、保護者は他の仕事をすることができません。しかし幼児教育に対する政府

の関心は高いとは言えず、また、幼稚部への支援はこれまでほとんどありませんでした。ですの、地域の人たちはシャントイの幼児教育支援にとっても喜んで

最後になりますが、カンボジアをご支援くださる日本の皆様に、心からお礼申し上げます。支援をいただくことができ、とてもうれしく思っています。皆様の健康と繁栄をお祈り申し上げます。これからもカンボジアへのご支援を続けてくださるとうれしいです。



コーク・ボンレイ小学校
学校支援委員会
メイ・リオンさん

この学校の創立以来、学校支援委員会のメンバーとして活動しています。この村の人たちのほとんどは非常に貧しく、多くの人が仕事を求めて村の外に出稼ぎに出ています。多くがタイへの出稼ぎです。親が子どもと一緒に連れて行き、学校に来られなくなる子どもたちもいます。祖父母に子どもを任せて親が出稼ぎに行くこともあります。こうした子どもたちへのケアは不足しがちです。

早い時期からきちんと教育すれば、その後の教育はよりスムーズになる。早ければ早いほど良い結果につながる。今日はじめれば、きつと近い将来、より良い発展があると願っています。私の世代では、教育を受けることはほとんどできませんでした。大変な状況にある私たちの村を支援くださり、本当にありがとうございます。皆さんのご支援は私たちの希望です。私も引き続き、学校の発展をサポートしていきます。

貧困の根っこにある原因の一つは知識と能力の不足です。人を育てることはとても重要です。

私はもともと小学校の教員ですが、3年前から幼稚部教員を務めています。学校は幼児教育の推進に努めている一方で、幼稚部教員がいなかったため、私がやろうと思いました。小学校以上に幼稚部の子どもたちを見るのは大変ですが、この仕事が好きです。

穫の時期には、親が子どもたちを農場に連れて行ってしまい、子どもたちが幼稚園を休みがちになってしまいます。シャントイの支援は、教員研修や教材など、私たちが必要とするものであり、とても喜んで

ただ、幼児向けの教授法がわからないため、たいていは自分ができる小学校向けの教授法を使わざるを得ません。ですので、研修の機会には私にとって非常に大切です。他には、教材や設備の不足に困っています。また収



コーク・ボンレイ小学校
幼稚部 園児と家族
サンポー・チュレットさん(右)
マカラ・ナヴィンさん(中央)
マカラ・ナリンさん(左)

父と母、祖父と子ども2人の5人家族です。1人目の子どもは10歳で小学校4年生、2人目の子どもは4歳で幼稚園に通っています。

てほしくないのです。自分の血肉をお金に変えるような、その日に手にしたものをすぐ口に運ぶような、その日暮らして生きている。

私も夫も、建設現場や農場での労働で生計を立てています。私自身、小学校4年生までしか教育を受けられなかったのが、仕事をみつけるのが大変で、仕事が見つからないと、その日食べるものにすら困ります。借金をせざるを得ません。

子どもたちには、良い教育を受けて良い仕事を見つけてほしいです。私たちのようにはなっ

特集 2 地域に根ざして

コミュニティ 図書館 (CLC) 事業



文字が読めなかったパー・ボムさん(33歳:左)にコブ・カルさん(13歳:右)が本を
読んであげている。パー・ボムさんは毎日、意欲的に識字教室に通い、暇を見つけて図
書館にも通っている。この写真はカンボジア教育省の年次報告書に掲載された

カンボジアではボル・ポト政権下の強制労働と内戦で教育を十分に受けられず、農民が貧困から抜けることを難しくする大きな一因となっています。シャンティの35年に渡るアジアでの教育・文化支援活動の経験を生かし、カンボジアの貧困農村部に子どもから大人までが集い、学べる生涯学習の拠点としてコミュニティ図書館(以下CLC)を設立し、地域住民による運営の自立化に向けて活動しています。図書館、識字教室、農業・保健衛生の体験学習、さらにはスポーツ・文化活動を一つの枠組みの中にとりこめ、これらの活動が相乗効果を生むよう工夫しています。

「貧困削減」目標のもと、異なる専門性を持つ他団体や行政機関と協力して、農業・保健衛生などの研修の提供を可能にし、住民の生活向上、ひいては地域の発展を目指しています。

そんな「楽しく、快適で、実践的な」コミュニティ図書館。2015年7月には教育省がシャンティの事業をモデルとしてCLCのガイドラインを制定、カンボジア全土に普及されることが決まりました。また、同年12月には「ESD(持続可能な開発のための教育)岡山アワード2015」のグローバル賞を受賞。世界で少なくとも7億8100万人の成人が基本的な識字能力を身に付けていない中、その課題克服に少しでも役立てることを願っています。



バタンバン州教育局
幼児教育課課長
チェン・ヴィスナーさん

バタンバン州教育局の幼児教育課には現在、私を含め8人の職員がいます。私自身は1992年以来20年以上、州教育局で幼児教育を担当しています。

バタンバンの幼児教育は非常に多くの問題を抱えています。まず人材不足。幼稚部教員はもちろんのこと、州・郡教育局の職員も不足しています。研修機会が十分でなく教員の能力も限られています。プノンペンにある幼稚部教員養成校の卒業生自体が少ないため、教員数を増やすには限界があります。教室

や教材などが非常に少ないことも問題です。

こうした事情からカンボジア政府は、公立幼稚園だけでなく、コミュニティが運営母体となる「コミュニティ幼稚園」や母親教育のプログラムを進めることで、幼児教育へのアクセス改善を目指しています。ただ、村人の家を間借りして運営せざるを得ないなど教育環境が非常に悪かったり、母親の会合への参加率が低く毎回違う人が来ていたり、必ずしもうまく機能しているとは言えません。コミュニティからの資金も限られています。その

点、小学校併設の公立幼稚園は多くの課題があるものの、既存の小学校のシステムを活用しているため、運営自体は比較的安定しています。

シャンティの幼児教育事業は大変重要なものです。おはなしや遊び、教室の環境改善について、教員たちは新たな知識や技術を身に付けることができ、幼稚園にとって役立ちます。国や州、郡そして現場の幼稚園と、すべての関係者にしっかりと情報共有し協働しているのもシャンティの良い点だと思います。2015年11月には、州教育局

とシャンティの間で事業の覚書を取り交わすに至りました。

最後になりますが、カンボジアの幼児教育のためにご支援くださる日本の皆さまに厚くお礼を申し上げます。幼児教育はとて大切な分野でありながら、大きな課題を抱えています。皆さまのご支援は、カンボジアの幼い子どもたちへの助けになります。本事業が成功したあかつきには、ぜひ二期目の事業を行い、バタンバン州全体にこの活動を広めることができればと願っています。





もちろん、昼間の図書室は子どもたちで大賑わい



童謡付き絵本を歌いながら楽しむ女の子



工作を楽しむ子どもたち

図書館



昼間に空き時間を見つけ、自主的に図書室を利用する識字教師とその生徒



図書館正面の縁側で、識字教室参加者と図書館員のガールズトーク

コミュニティ 図書館の 1日



コミュニティホール



野菜栽培の研修



バレーボールをしている脇でカンボジア版チェスを楽しむ人が思い思いに過ごしている



文化活動としてコミュニティホールでは映画上映会も



村で獲れた野菜や果物が並ぶ村市場が開かれる

カンボジアの貧困農村部で活動を開始したコミュニティ図書館（以下CLC）は、開館当初から自由でリラックスした雰囲気をもとに、子どもから大人まで多くの利用者と賑わっています。次第に学ぶことを楽しむ住民が増えて、村全体が前向きで積極的なムードに包まれ、文字の読めない大人に子どもが本を読んでもあげる光景が自然とみられるなど、良い循環が生まれています。（カンボジア事務所 江口秀樹）



暗闇の中、太陽光発電で灯りがともるコミュニティ図書館



多目的室（夜）識字教室



多目的室（午後）中学生による識字授業



多目的室（午前）コミュニティ幼稚園の授業風景

多目的室

コミュニティ図書館(CLC)のある生活

コンボントム州のニーベック集合村とシエムリアップ州のロンコー集合村にコミュニティ図書館ができて1年。図書館に多目的室を併設しており、多目的室では朝は幼稚園、夜は大人の識字教室が開かれて、1日中、住民で賑わっています。

また、図書館の蔵書は1000冊を越え、民話絵本から暮らしの向上につながる農業や保健の書籍も揃え、子どもから大人まで利用されています。識字教室で学んだ大人が、昼間は図書館で本を読んでいる姿もよく見られており、そこに通う村の住民たちの生活に早くも変化が現れました。

識字教室は農作業や家事が終わった夜に
1日2時間、週6日間、行われている



チア・サリー

36歳 / 農家(CLC農業普及員)

ニーベック集合村

チア・サリーさんはコンボントム州にあるニーベックコミュニティ図書館(CLC)の近所に、夫と4人の子どものと住んでいます。サリーさんはCLCの開館からこれまで、あらゆる活動に参加してきました。サリーさんは、農業普及員として3種すべての農業研修(野菜栽培、養鶏、稲作)を受け、現在は他の住民に教えているだけでなく、識字教室にも通っています。

以前は、読み書きができず、日々の暮らしに不便を感じていましたが、7カ月のコースの識字教室にこれまで5ヵ月通い、村に貼ってあるポスターや役所のお知らせが読めるようになりました。本も字が大きいものなら読めるようになりました。その他識字教室で、栄養のバランスを考えて野菜を食べることや、貯蓄の重要性など、読み書き計算以外の実生活に役立つ知識、技術を学びました。今は読み書きができる人とも堂々と話せるようになり、人生全般に自信が持てるようになりました。



ウン・ハイ

49歳 / 農家(CLC農業普及員)

ロンコー集合村

ウン・ハイさんは妻と3人の子どものとシエムリアップ州のロンコー集合村に暮らしています。ハイさんもニーベックのサリーさんと同様に、3種の農業普及員でありつつ、男性では珍しく、識字教室にも通っています。



イット・ブッタ

44歳 /

教育省コンボントム州教育事務所職員

わたしの夢は、この辺一帯で一番の農家になることです。以前は効果的な農業のやり方がわかりませんでした。そのため、野菜や鶏がうまく育てられず、よそに売るところか一家の食事もまかなえず、他の農家から買っている始末でした。それがCLCができて、新しい農業技術を学んで実践し、暮らしが大きく変わりました。野菜と鶏がみちがえるほど育つようになり、よそに売れるようになりました。今はCLCで農業普及員として他の農家に農業技術を教えています。将来、シャンティがCLC事業を終了させても、学んだ新しい農業技術をわたしがみんなに教え続け、CLCの活動を支援したいと思います。

シャンティの成功の秘訣は、活動がシンプルで誰にとっても単純明快であることと、コミュニティごとに住民の要望を入念に調べあげ、住民のニーズに合致しているということだと思います。とりわけ、シャンティのモットーである「教育をカジュアルに」は、CLCを楽しく、快適な場所にし、教育施設特有の敷居を下げるというアプローチですが、この方法はふつうなら利用があまり見込めない青年層の取り込みに大きく貢献すると思います。来年末をもって、ニーベックCLCの運営は、完全に教育省と地域住民に移管されますが、わたしたちが責任を持って持続発展させていきます。この場を借りて、シャンティのCLC事業を支援している日本のご支援者の皆さまに心から感謝いたします。

これからが正念場

村の人の手で地域に根ざした
コミュニティ図書館になるために

カンボジア事務所長 玉利清隆



写真：川端嘉文

コミュニティ図書館(CLC)の第1、第2号館が開館して1年が経過しました。日本の皆さまのご支援やカンボジア関係者の方々のご協力により、地域住民の方々に利用される施設として、まずは順調な滑り出しができたと思います。今まで教育を受けた事のない人々が識字教室で一生懸命勉強し、また研修で習った農法を自分の家で実践している様子を見ると、このプロジェクトを実施して良かったと感じます。

ただ、この1年間は各CLCが活性化するように、シャンティが手厚くサポートしてきました。CLCの建物や多目的ホールの建設に始まり、家具やソーラーパネル等資機材の設置、図書やハンモック、スポーツ用品の供与などハード面の支援の他、CLC運営委員や識字講師に対する研修、住民への農業や養鶏など生計向上に繋がるトレーニング等、人材育成にも力を入れてきました。更に、郡の教育局や集合村行政にもCLC

の運営に関わるよう働きかけています。カンボジアの農村の人々にとって、図書館や学習センターという施設を見るのが初めてであるため、最初は彼らに新しい施設を理解し活用してもらうために、ある程度の投入は必要でしょう。しかし我々が深く関わりすぎると、住民が支援してもらうことに慣れてしまい、自ら考え努力する事を怠り、中長期的にはネガティブに作用してしまう危険性もあります。どのくらいの期間、どのレベルまで関わっていくかを見極めるのは難しいところです。

シャンティはCLC開館2年目からは、物資の供与は控え、運営面での助言や住民の自主性を促すファシリテーションなど、ソフト面の業務に移行していきます。そして開館後2年でCLCを運営委員会に引き渡す計画で、その後は彼らが地元行政と協力しながら運営していく事を想定しています。とはいえ、貧しい農村における事業であるため、計画通りにいくとは限りません。住民組織への引き渡しは順調に行われ、未永く村の施設として有効に機能していくことができるかどうか、まだまだ住民と協力しながらの試行錯誤が続きます。

日本 しゃんてい の旅

12 長野県上田市 大輪寺



①静かなたずまの境内には壮麗な山門 ②境内墓地には寒松院の墓 ③絵本『おおきなかぶ』(福音館書店)を手に近藤博道住職

●大輪寺
長野県上田市中央北1-5-7

●アクセス
北陸新幹線「上田駅」下車(車5分
または徒歩30分)

●周辺のみどころ
徳川の軍勢を二度撃退した歴戦の
名城「上田城跡公園」(車で10分)
「池波正太郎真田太平記念館」
(徒歩15分)
「北国街道柳町」(車で10分)

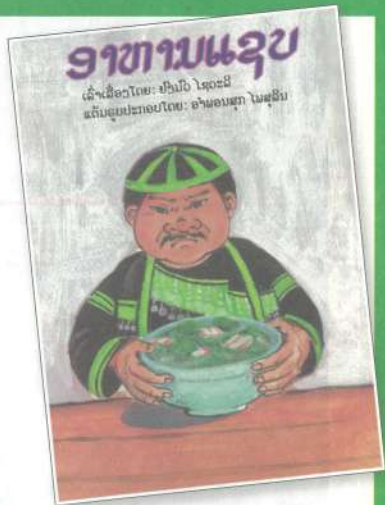
NHK大河ドラマ「真田丸」の舞台として盛り上がる長野県上田市。大輪寺は初代上田城主真田昌幸の夫人寒松院が発願して再建され、境内墓地には寒松院の墓がある曹洞宗寺院です。静かな境内、庭園は桜やつつじ、紅葉のころがいっそう美しいとのこと。

近藤博道住職には長く「国際ボランティアの寺」としてご協力いただいております。「絵本を届ける運動」への参加も通算2000冊を数えています。活動地へのスタディツアーに

も参加くださり、特に2003年、カンボジアを訪問した際に、村の住民総出で歓迎してくれたのが印象深かったとのこと。「スタディツアー」は参加者も個人的で、子どものために活動している人が多い。人の出会いはありがたい」と懐かしんでおられました。

真田家ゆかりの寺院めぐりの後は旧北国街道の家並みが残る「柳町」のカフェで一休み、駅まで城下町らしい落ち着いた風情の通りを散策するのも楽しみです。





世界の絵本を読んでみよう

12

モン族の民話絵本
ラオス

おいーじーはん

1
むかし、ごはんの
おいしい店がありました。



2
あるときそこに、
まずしい男が
おなかをすかせてやってきました。



3
「この店は、一皿いくらでしょうか」と
店のしゅじんにたずねると、
「コイン5まいだよ」と返されました。
「コインが2まいしかないんです。
たべられるものはありませんか」と
男はききました。



4
するとしゅじんは怒りだし、
「じゃあそれはらわんか！
あんたは今、うちの店の料理の
においをかいだらう！
はらわれないなら出ていけ！」
と、男を追い出しました。



6
王宮で王さまは
まずしい男に言いました。
「2まいのコインを手のなかで
ふってならしなさい」
男は言われたとおり、
コインをチャリンチャリンと
ならしました。

5
そこに王さまがとおりがかり、
ながあつたのかとたずねました。
店のしゅじんは男をゆびさして、
「こいつは私が作った料理の
においをかいだのに、
コインをはらおうとしらないのです」と
言いました。
王さまはふたりに、
王宮にくるようめいれいしました。

7
王さまはこんどは
店のしゅじんに言いました。
「この男は、あの日ごはんの
においをかいだが、
たべはしなかった。
そうしておまえは今ここで
コインの音をきいた。
これでおあいこだろうか？」



8
店のしゅじんは、
このことばをきいてはすかしく思い、
そそくさと王宮から出ていきました。

シャンティな人たち

vol. 71

शांति

カンボジア幼児教育事業プロジェクトチーム

社会福祉法人 天竜厚生会
てんりゅう・こうせいかい

天竜厚生会は静岡県内で保育事業や高齢者福祉、障がい者福祉などの事業を幅広く行う社会福祉法人。保育・教育部門では、「感性豊かで『生きる力』をそなえた子どもを育てるために」を理念に、県内で12保育園と2幼稚園を運営している。シャンティがカンボジアで開始した幼児教育事業では、天竜厚生会の保育士を中心とするメンバーでプロジェクトチームを構成し、専門家として研修教材の開発や子どもたちにとって魅力的な環境づくりなどへのアドバイスを行っている。プロジェクトチームリーダーの伊藤孝さんとメンバーの大霜光里さんに話を伺った。



プロジェクトチームメンバーとシャンティカンボジア事務所職員。
上段左から2人目：伊藤孝さん、下段左から2人目：大霜光里さん。

「どこに行っても子どもは同じですね」。昨年2月、カンボジアに初めて視察に行った二人。一緒に遊ぶときの子どもたちの笑顔は、カンボジアでも日本でも同じと感じたという。

しかし、「子どもがおかれている衛生環境がひどく、こういった中で生活しているのは想像できない。幼児用の教室がまるで倉庫のような状態だったり、実際に現地に行ってみてわかったことが多い」と大霜さん。伊藤さんは、「幼児が長時間座って授業を受けるだけではなく、生活やあそびを通して『生きる力』の基礎を培う環境（場）が必要」と感じたそうだ。幼い子どもたちは「遊び」を通して学ぶことが重要だが、カンボジアでは教育偏重になっているらしいがある。

リーダーの伊藤さんは、以前テレビ番組を見てカンボジアの状況を知り、自分でできること

があればとずっと思っていた。そんな中、カンボジア視察の話をきき、即座に視察ツアーに応募したという。現在は、伊藤チームリーダーを筆頭に、シャンティのカンボジア事務所とネット経由の通話やメールでのやり取りを重ねながら、カンボジアの幼児教育の教員研修のマニユールづくりなどを進めている。マニユールづくりの大変さについて、「こうした方がもっといいと思うことはたくさんあるが、日本の感覚で作ってしまうと現地の人に伝わらない部分がある。難しいことを提案してしまつて、現地で実際にできない

と意味がないので、現地のことを考えた上で発言するようにしている。伝わるか伝わらないかを考えてシャンティの職員に提案している」と、大霜さんは言ふ。専門用語などはできるだけ分かりやすく説明するように心がけているようだ。

大霜さんは視察の前に、担当する保育園の子どもたちに国旗などを見せてカンボジアに行くことを説明した。帰国後、園の子どもたちが「カンボジアの子どもたちはどうだった？」などと聞いてきたという。また、大霜さんはカンボジアの状況を知ること、もののや食べ物を大切に

にすることを再確認できた。これを日本の子どもたちに伝えていかなきゃいけないと改めて思った」とのこと。

「プロジェクト終了後は、カンボジアの子どもたちに以前と違った様子が見られたり、日常生活の部分でちよつとでも目に見えるような変化があったらいいなと思う」とプロジェクトへの期待を語った。

プロジェクトはこれからが本番。今後は静岡県と連携し、プロジェクトメンバーによる現地での指導や、カンボジアの行政職員や教員への日本での研修を予定している。

（海外事業課 眞屋友希）



上：2015年11月天竜厚生会まつり シャンティのクラブ販売ブースにて大霜さん。
中：2015年6月シャンティカンボジア事務所職員の大霜さん天竜厚生会保育園実習受け入れ。
下：2015年2月カンボジア視察にて。カンボジアの小学生と交流する伊藤さん。



NPO法人「あつまれ、浜わらす!」になりました

Japan 気仙沼

報告：笠原一城（気仙沼事務所）

これまで、気仙沼事務所で行ってきた子ども支援「あつまれ、浜わらす!」がNPO法人になりました。この場でご報告させていただきます。

震災から4年が過ぎた気仙沼市では、少子高齢化に伴う地域の衰退が大きな課題となっています。2040年には39歳以下の働き手が大幅に減少する予測がされ、税収が見込めず市が消滅してしまう可能性があります。

浜わらすでは、このような地域課題を視野に入れ、気仙沼の最大の魅力であり脅威でもある海とのつながりを次世代に伝えて行くと同時に、地域の資源（自然、人、仕事）を活発化させ、将来の子どもたちが魅力的に感じ暮らしていけるまちづくりを目指します。

来年以降は、市外の方たちにも「海のまち気仙沼」を体感していただけるよう気仙沼体験ツアープログラムも行いますので、東北を訪れる際には是非、浜わらすまでご連絡ください。

今後とも応援よろしくお願ひします。



コーヒーから広がる人の縁

岩手 Japan

報告：吉田晃子（岩手事務所）

陸前高田市高田高校第2グラウンド仮設住宅の集會室では、毎日午前8時から10時まで美味しいコーヒーをいただくことができます。

東日本大震災の前、高田町で喫茶店を営んでいた中川聖洋さんは、震災で米崎町の仮設住宅に移りました。友達が多く住んでいるこの仮設住宅に遊びに来ている時、知り合った方からコーヒー豆の支援をもらったのがきっかけで始めたコーヒーを楽しむ会「珈琲日和」。2012年4月から、毎日8時に住民が自分のカップを片手に集まり、情報交換をする場になっています。

震災からもうすぐ5年が経ち、災害公営住宅や高台移転先の住宅に引っ越して行く住民が増えてきました。「震災から一緒に頑張ってきた仲間と離れるのは寂しいが、新しい一歩を踏み出すのも大切。今度は新しい場所と同じように繋がってもらいたい」と集會室での活動を終了する予定の中川さん。知り合った人たちは「体操の日」「手芸の日」など仲間同士繋がって活動をはじめています。これから新しい場所に引っ越してもその繋がりは途切れることはありません。

シャンティからのお知らせ

ミャンマー洪水被害への緊急支援ありがとうございました

2015年6月末～7月にかけての豪雨により、ミャンマーでは洪水による大きな被害を受けました。ミャンマー事務所では、事業地であるビー県の郡総務局、避難所の担当者との調整をもとに、同県バダウン郡の避難所11カ所845世帯3,500人及び、被害が大きいにもかかわらずポートでしかアクセスできない2村に暮らす約1,500世帯6,000人に対して、魚の缶詰、下痢や長引く避難所生活からくる体調不良のための経口補水塩、ビニールシートを配布する緊急支援を実施しました。これらの品は他からの支援はなかったため、被災者の方々から大変ありがたいとお声をいただきました。募金支援ご協力をいただきました皆さまに、ご報告とともに感謝申し上げます。

担当：海外事業課 藤川和美

2016年度定時社員総会を開催します

2015年事業報告と、2016年事業計画を決定する定時社員総会を開きますので、どうぞご参加ください。社員会員には議決権があります。

日時：2016年3月26日(土) 13:30～19:00
会場：曹洞宗 萬亀山 東長寺P3 art and environment
東京都新宿区四谷4-34-1
新宿御苑前アネックスビル1F

- プログラム
- ①2016年度定時社員総会
- ②鎌倉幸子 講演会「図書館は、国境をこえる。～カンボジアから東日本大震災の現場まで」
- ③永年会員表彰
- ④懇親会

※社員会員の方には後日総会資料をお送りいたします。

「絵本を届ける運動」申込み受付を開始しました

2015年度は約16,500冊の絵本を集めることができました。皆さまのご協力に心より感謝いたします。これらの絵本は2月に活動地に向けて送ります。1月より、2016年度絵本の申込み受付を開始します。今年度は18,164冊の絵本が目標です。ホームページまたは電話にてお申込みください。皆さまの参加をお待ちしています。

担当：絵本を届ける運動 野口早苗・河口尚子

人事のお知らせ

- 入職
伊藤杏子 海外事業課 アフガニスタン事業担当(12月1日付)
- 異動
吉川次郎 海外事業課 経理担当より、山元事務所(南相馬拠点) 福島事業担当(10月1日付)
- 退職
菅磨里奈 海外事業課 アフガニスタン担当(10月31日付)
- 鎌倉幸子 広報課 課長代行(12月31日付)
- 鎮野誠 経理総務課 データ管理・IT担当兼 広報課 Web業務(12月31日付)

編集後記

ベランダ園芸も3年目。ハーブ中心ですが、水や肥料をやったり、日差しを当てたり遮ったり。植物の種類によって必要な水の量が違うので、毎日、土や葉の様子を見ながらの手入れは、なかなか手がかりがありますが、その分、大きく茂った株を見る嬉しさも格別。子どもも植物も丈夫に育てるには、それぞれの特性にあわせるのが大切なのだと感じます。(清野陽子)

シャンティ 2016年冬 283号 2016年1月1日発行

発行人 若林恭英
発行所 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015 東京都新宿区大塚町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
WEB: <http://www.sva.or.jp> E-Mail: info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

編集人 関尚士
装丁・レイアウト 矢萩多聞
印刷 株式会社大川印刷 【定価550円】

©2015. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。



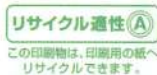
小高を歩く思いさまざま

報告：古賀東彦(山元事務所)

山元 Japan

南相馬市南部の小高区には現在、東京電力福島第一原子力発電所の事故により全域に避難指示が出されています。2016年4月、それが一部解除される予定です。8月31日からは、故郷での生活をスムーズに再開できるようにと、条件つきながら希望者は自宅に戻って泊まれるようになりまし。生活の気配が消えていた小高も、除染作業以外にも、人の姿や車の行き来が少し目立つようになってきました。

写真は、小高地域構想ワーキンググループが主催した「小高あるさき」の様子です。小高を散策しながら、土地の歴史や文化を学ぼうという試みで、この日は中心部を離れ、浪江町に近い上浦という地区を30人ほどで歩きました。参加メンバーは、土地の人、行政の職員、大学の研究生、小高の復興を願う区外の人などさまざま。「この土地に戻ってがんばると我々は決めた。我々とは言うたけれど、いまはまだ我々だけのようなもの、次の我を待っているところだ」と、土地の方。避難指示が解除されても、故郷に戻る人は1割程度ではとも言われているだけに、重い言葉です。



「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。



道



ささやかな恋

常務理事

早坂文明はさかふみのり

1987（昭和62）年12月にテレホン法話を始めた。3分間の法話を吹き込んでおけば、誰でも、いつでも、どこからでも、聴くことができるという留守番電話サービスである。月3回（1・11・21日）更新をする。しかし、田舎寺でのこと、あまり関心を示されず、ネット情報と比べたら微々たる広がりではない。それでも毎回必ずどなたかが聴いて下さり、これまで聴取回数ゼロということはなかった。それを励みに、休みなく続けて、昨年10月、千回を達成した。28年の歳月を要したが、今も継続している。約5万回の通話が記録されている。

もうひとつの励みは、カンボジアの子どもたちである。勿論、彼らがテレホン法話を聴いてい

るといふ訳ではない。テレホン法話継続の副産物としてテレホン法話集の出版がある。これまで6冊が世に出た。その売上金や本をご縁としての募金などでカンボジアの子どもたちに、7タイトル（各3千冊）の絵本を贈ることができた。

僅か3分間のテレホン法話は、聴き終れば露の如く消える定め。だが一滴のしずくも、集まれば川となり海に注ぐこともあるように、ささやかなテレホン法話も、何らかの形になり、カンボジアの子どもたちにも届けられないものだろうか。そう思った時、テレホン法話と絵本が結びついた。

私とカンボジアとのご縁は、シャンティが結成されて間もなく展開された「カンボジア難民に衣類を贈る運動」である。宮城県曹洞宗青年会の一員として、

活動に参加した。初めてカンボジアを訪れたのは1992年のこと。混沌とした街中を裸足で走り回りながら、何ら屈託もなにかのような子どもたちの澄んだ瞳に恋をしたのかもしれない。以来、この子どもたちの笑顔が消えないようにという願いを持ち続けてきた。

たまたま、テレホン法話千回を記念して、7タイトルの絵本「パンダのソビアクの冒険」を制作していただき、贈呈できた。現在シャンティが力を入れているカンボジアの幼児教育の現場で活用されるという。子どもたちの澄んだ瞳に思いを馳せながら、テレホン法話を続けて来た甲斐があった。ささやかでも善きことを続けていれば……電話急げ。【徳本寺テレホン法話 0223・38・1717】（宮城県徳本寺住職）

混沌とした街中を裸足で走り回りながら、何ら屈託もなにかのような子どもたちの澄んだ瞳に恋をしたのかもしれない